

平成28年度 国立赤城青少年交流の家 教育事業
あかぎ多文化共生推進事業 実施報告書

はじめに

現在、群馬県の外国人登録者数は、約4万4千人。県全体の人口に占める割合は約2%であり、その多くがブラジル人である。なかでも太田市大泉町は人口比約16%で、ブラジル人等のコミュニティが形成されている。その中には様々な壁により、地域社会への適応がスムーズに進まない多くの青少年も含まれている。

学校の学習指導要領においても「体験」の重要性が指摘されており、日本人の子ども達は小学校・中学校で林間学校などの宿泊学習を行う。しかし、在日外国人学校において宿泊体験学習などの体験活動を実施している学校は少ない。国内のブラジル人の半数以上が、永住者として在留するようになるなど、在日外国人の定住化が進む中、キャンプという非日常な場において様々な体験活動を通じて心を開放し、仲間をつくり、日本の良さに気づく機会をつくることは重要である。

このような地域の実情において、国立赤城青少年交流の家は、多文化共生の地域づくりの一助となるように多文化共生推進事業を教育事業として取り組んでいる。

事業の概要

[ねらい]

- 1 国籍の異なる仲間との宿泊生活を通して、直接相手のことや文化を知り自分以外の価値観を認める考えを持つ。
- 2 様々な体験活動を通じて心を開放し、仲間をつくり、自信をつける機会をつくる。
- 3 ボランティア及び社会人スタッフが、多文化共生についての理解を深める。

現在、行っているあかぎ多文化共生推進事業は次の3つに分類される。

① あかぎワールドキャンプ

【平成28年 8月18日(木)～ 8月20日(土)】

国籍も様々、言語も様々な参加者を赤城に集めて交流キャンプを行った。

(H26主催事業、H27共催事業、H28協力事業)

② あかぎ多文化交流キャンプ

【平成28年10月 1日(土)～10月 2日(日)】

群馬大学 学生支援機構・大学教育の文化庁委託事業 平成28年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業「ハタラクラスぐんま」地域日本語教室(通年)の第3回・第4回を「あかぎ多文化交流キャンプ」として実施した。

③ 在日外国人学校プログラム支援

【※今年度は、未実施。】

群馬県における在日外国人への体験の場を提供する。

[内容]

①

「あかぎワールドキャンプ」	
日程	平成28年8月18日(木)～8月20日(土)
会場	国立赤城青少年交流の家
参加者	アジア共同体学校(韓国釜山市の学校) 8名 ティー・エス学園(埼玉のブラジル人学校) 20名 日本の子供達 23名 計51名
スタッフ	大学生ボランティア 18名 社会人ボランティア12名 国立赤城青少年交流の家職員 1名 計31名
連携団体	あかぎワールドコミュニティ(略称 AWC) 前橋市赤城少年自然の家 赤城山エコツーリズム協議会 ティー・エス学園、釜山アジア共同体学校、その他 (事業当日視察:前橋市教育委員会、ブラジル領事館など)

<活動日程>

8月18日	8月19日	8月20日
10:30 はじまりの会	6:00 起床	6:00 起床
12:00 昼食	7:00 朝のつどい	7:00 朝のつどい
13:30 レクリエーション	7:30 朝食	7:30 朝食
16:30 野外炊事①	9:00 JICAタイム	8:30 バス出発
18:30 夕食	11:00 野外炊事②	9:30 石窯ピザ体験
20:00 スポーツ大会	15:00 ワールドパーティ準備	(天候によりカッター体験中止)
21:00 入浴	17:30 ワールドパーティ	11:00 昼食
23:00 就寝	(開始各国の食とダンスや歌などの文化を通じた交流活動)	12:30 お別れの会
	22:00 入浴	13:00 解散
	23:00 就寝	

〈活動の様子〉



レクリエーション



野外炊事①(カレー)



スポーツ大会



朝のつどい



JICAタイム



野外炊事②(焼うどん・マシュマロ・スイカ割り)



ワールドパーティ



石窯ピザ体験

②

	「あかぎ多文化交流キャンプ」
日程	平成28年10月1日(土)～10月2日(日)
会場	国立赤城青少年交流の家
参加者	「ハタラクラスぐんま」地域日本語教室 計27名
スタッフ	大学生ボランティア 1名 国立大学法人群馬大学 大学教育・学生支援機構 教育改革推進室 13名 国立赤城青少年交流の家職員 2名 計16名
連携団体	

〈活動日程〉

10月1日	10月2日
9:30 送迎バス出発	6:00 起床
10:50 交流の家 到着	7:00 朝のつどい
11:00 はじめの会	7:30 朝食
12:00 昼食	9:00 健康づくり(ストレッチ)
13:30 あかぎアドベンチャープログラム	9:30 森のパワー(木の実ハンティング)
17:00 タベのつどい	10:30 クラフト作り
17:30 夕食	11:00 寄せ書き作成・アンケート
18:30 キャンプファイヤー	12:00 昼食
19:30 入浴	13:00 おわりの会
20:30 振り返り	13:30 バス出発
22:00 就寝	14:30 解散

〈活動の様子〉



あかぎアドベンチャープログラム(大人)



あかぎアドベンチャープログラム(子ども)



キャンプファイヤー



振り返り



森のパワー(木の实ハンティング)



クラフト



クラフト作品



寄せ書き

成果

① ・昨年度に発足したあかぎワールドコミュニティ(略称 AWC)は、多文化共生の実現に向けて継続的な活動ができるよう自立的な団体として動き始めて2年目の試みとなり、ゆめ基金を取得して独自にキャンプを運営することができた。(その後、企業からの協賛によって経費が賅えたため、ゆめ基金の利用は取り下げた。)交流の家では協力事業としてプログラムの検討、提案をし、当日の安全管理を含めて事業運営に携わった。

・多言語の子供たちが集い、意思疎通が困難な状況の中で、レクリエーションでは体を動かしながらコミュニケーションをとることで、ゲーム感覚で楽しみながら共通の考えを導き出すことができた。アンケートより、多くの参加者は、「他の文化を理解できた」「他国の人と交流するのは楽しい」「学校以外の場所で初めて会った人と仲良くなれることを知った」などの感想をもつことができ、様々な体験活動や宿泊を通じた直接的な関わりから価値観を認め合い、仲間をつくることができた。

・外国においては集団宿泊という概念があまりないので、在日外国人にとっては宿泊自体に抵抗を感じてしまうことが多い。青少年教育施設でキャンプをしたことで、集団宿泊を通して様々な日本文化や慣習(挨拶、大浴場など)に触れることができた。

② ・連携先と事業後の振り返りを行い、「ハタラクラスぐんま」地域日本語教室の第3回・第4回であったが、指導者と参加者または参加者同士が打ち解けた様子が見られ、教室への参加率向上にも繋がった、との評価を頂いた。

・下見・打ち合わせを重ねて昨年の反省を踏まえ、あかぎアドベンチャープログラム、キャンプファイヤー、森のパワー(木の実ハンティング)、クラフトとプログラムを設定したことでよりキャンプの目的(ねらい)に沿った内容となった。プログラムで負荷をかけながらも参加者同士の関係性を深めながらねらいやゴールに向けて満足できるように組み立てた。

・宿泊体験を通して様々な日本文化や慣習に触れることができた。(挨拶、大浴場など)親子で参加した保護者にとっては林間学校の一連の流れの例を体験できたことにより、子供が通う公立学校での日本の宿泊体験学習への理解が得られた。

・親子でも、親が母国語、子供が学校で必要に迫られ日本語を話すという背景から、親子間の意思疎通がうまくいかず、ボランティアに甘えたり傾向の子供の様子が見られた。しかし参加者同士のつながりの雰囲気から見守りの目ができ、子供の成長も見られた。

・多くの参加者は、「楽しかった」「また来たい」などといった感想をもつことができた。

まとめ

今年度は2つの多文化共生推進団体との連携を図り、キャンプを行った。言葉は思うように伝わらなくても、レクリエーションやスポーツを通して、コミュニケーションが図れることを実感した。みんなでひとつのものを作り上げていく、寝食を共にするという体験を通して心を通わせていく。こういった体験活動の重要性や効果を知り、多文化共生に理解のある人材育成をキャンプという実践の場を通して行っていくことが必要だと考える。

今回、施設の利用にあたり、連携団体先にオリエンテーション資料や実際の指導の様子を撮影した動画データを渡すなどし、事前に指導をしてもらった。屋内での飲食や食べ歩きなどが全く見られなかったわけではないが、日本の風習や慣習を教える意味では、今後も根気よく指導を続けることが大切だ。また、キャンプ中は数か国語が混在していたので、言語を介さずに、五感を使って活動ができるプログラムを設定した。説明の際は、「一指示・一行動」を原則とし、実物を使い、通訳者が分かりやすいように短く簡単な言葉で説明するなど外部講師の方にも協力して頂いた。

課題としては、事業の評価軸になるアンケートの集計方法がある。多くの参加者は日本語を話すことはできるが、読み書きは母国語であることが多いため、アンケートの文章を事前にそれぞれの言語に翻訳し、レ点チェックで回答できる様式にした。しかし、参加者が母国語で記入してくれた生の声を翻訳しきれないところがある。また、今回は日本人(地域の方)との交流をプログラムとして組み込むことができなかった。これからもこの地域で生活していきたい・いくという在日外国人の現状を踏まえると、日本の文化を知って体験し、日本人との関わりを通してお互いに異文化交流を深めていく必要がある。

群馬県内には多文化共生推進団体が多くある。来年度以降も新しい連携先を増やしなから、これまでのつながりを大切に、地域の中で自然と異文化交流が生まれ、在日外国人と日本人が共に地域を作り上げていけたらと願っている。

担当:地域連携チーム 高橋 悠